

# マリノベーションは漁村を豊かにするのか

## 上磯町茂辺地地区の事例について

ささき・あきら  
1968年東京生まれ。函館在住。北大水産学部大学院在学中より道南の自然、歴史を地元タウン誌等で紹介。現在フリー・フォトライター。「松倉川を考える会」事務局員（会報担当）。

佐々木 聡

本文のねらい

近年環境保全や一次産業見直しの世論が高まる中、地域振興をうたった開発の波が農・漁村に押し寄せつつある。「マリノベーション構想」の進む漁村からその問題を整理し、今後の漁村開発の方向性を考察する。

### 一 サケと湧き水の里・茂辺地集落

上磯町南部に位置する茂辺地（もへじ）の町は、沿岸漁業を主とする人口二千人ほどの漁村である（図1）。茂辺地とはアイヌ語の「モベツ」（静かな川）の訛化した地名であり、古くから湧水に恵まれたサケの産地として知られてきた。明治十二年から先駆的な孵化放流事業が行われてきたことは有名である。また室町期には北日本海の交易を統括していた安東水軍によって「茂別館」が築かれ、中世津軽海峡の拠点都市でもあった（注一）。一四五七年にはコシャマイン率いるアイヌ勢力との間に大規模な戦闘も生じており、地域にはサケと茂別館、領主下国氏にまつわる数々の伝説が今なお残されている。湧水に育つサケが、茂辺地の特色ある歴史を支えてきたといえよう（注二）。

### 二 現在の河川利用

高度成長期、茂辺地の流域環境は大幅に改変される。ブナを主とした水源林（約九〇㎏）は伐採され、四五％が針葉樹に転換された（図2）。河川環境も改修によって激変。淵や瀬は失われ、町中にあった湧水の池や小川も消滅。川と地域生活との関わりは薄れていった。このような中で始められた「さけまつり」は、川と集落との関係を再

構築する一つの試みでもあった。河川敷の捕獲場を会場としてサケのつかみどりやクイズ大会を行う地域イベントは、九七年で一六回を迎えている（注三）。川から子供の遊ぶ姿は消え、代わってサケを見物する観光客が「川の自然」を楽しんでいる。

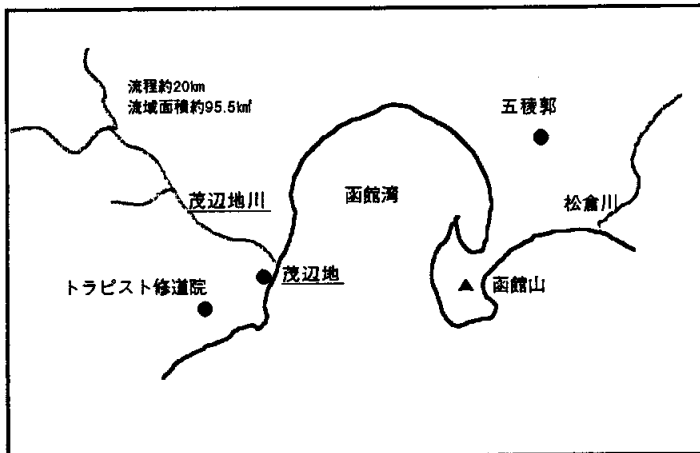


図1 茂辺地地区の位置

### 三 「マリノベーション」とその問題点

現在、茂辺地では「マリノベーション」と名付けられた漁村の再開発事業が進められている。これは「縦割行政の枠をこえて漁村の活性化をはか

る新しい試み」であるといい、茂辺地は津軽海峡マリノベーシヨンの拠点地区と位置づけられている(注四)。

事業の主な目的は漁村の活性化である。そして計画では、自然環境の保全、生活環境の改善、地域文化の継承、都市住人とのふれあい、等がキーワードになっていく。具体的には漁港の大幅な拡張とともに前浜を埋め立てて「さけまつり」のためのイベント広場(ふれあい漁港・図3)を造る他、下水道や流雪溝といった生活施設、河川敷に「サケ見公園」の建設等が予定されている。これら施設整備の費用は約八〇億円が見込まれる(注五)。

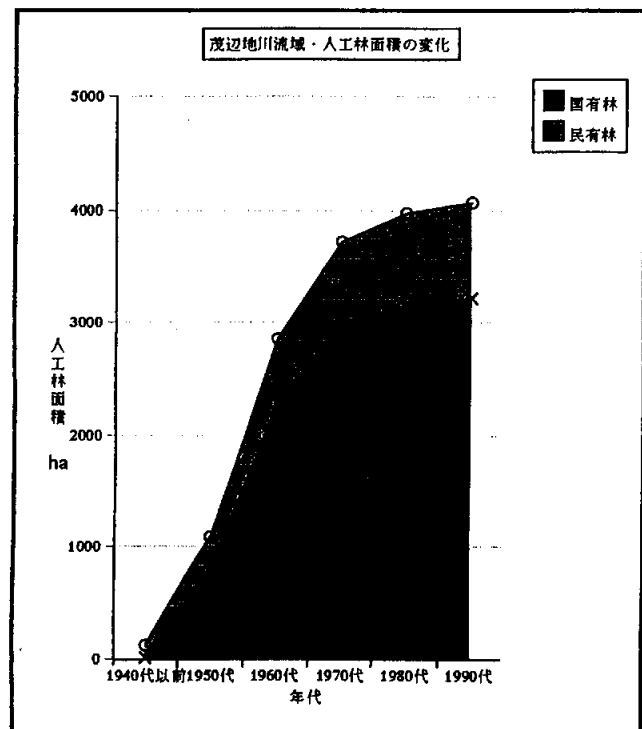


図2

自然環境の保全をうたった「マリノ」事業であるが、一方では地域環境全体に対する大きな懸念がある。一つは下水道や流雪溝という地下パイプラインの影響である。サケはじめ多くの魚類の生息には川底に湧き出す伏流水が大きな役割を果たしているが、伏流水が下水管に抜けてしまうことが指摘されている。また冬期、自然孵化したサケやマスなどの稚魚が流雪溝に飲まれれば、育つ間もなく雪とともに海に流されてしまう。そして河川水と地下水を集め海へ注ぐ「人工の川」は、サケ等の溯上にも影響するのではない。茂辺地の下水道・流雪溝は都市下水ほどに巨大なものではないが、施設建設が河川環境や魚の生息に与える影響が全く考慮されていないのは大きな問題である。

第二に下水放流水の水質の問題である。基準ではBOD値二〇ppm、実際の放流水は十二ppm程度になるというが、この値は現在のトドメキ川(COD値二ppm以下、十五ppm)と大差なく、茂辺地本流(BOD値〇・五ppm前後)に比較してもはるかに汚い。これを一日八〇〇トン放流すれば下水道自体が新たな汚染要因になるだろう(注六)。また大雨時の無処理放流も考慮しなければならない。九七年

八月に石狩太美地区で問題にされたが、市民に知らされていないだけであり、大雨の下水道に無処理放流は付き物である。

第三の問題は、過疎地の下水道建設には費用対効果の問題がきわめて大きいことである。下水道の建設費は六〜七割が土管を埋める道路工世代のため、過疎地では一人あたり建設費が膨れ上がる(注七)。これは流雪溝にしても同様である。排水処理や河川浄化の方法は下水道だけではない。例えばトイレの水洗化ならば過密都市以外では戸別合併浄化槽の方が建設費は低く(注八)、また河川の小規模な汚染であれば直接浄化や住民的対応も検討されてよい。下水道偏重の現行補助金制度の下では住民負担が大きくなる場合もあるが、いざれもトータルコストは下水道よりはるかに小さく、長期的には住民・自治体の負担は軽減される。また金額以外の効果も期待できよう。

地域の住民が、現在の川が汚れていると感じていることは事実である。だがこの住民感覚としての「汚染」には、水質悪化のみならず、泥の堆積や生物の減少、護岸による景観悪化等が含まれていると考えられる(図四)。ヘドロを溜めこみ悪習を発する都市河川の汚染とは、質的に全く異なっていることに注意しなければならない。

漁村の排水処理・河川浄化には低人口・低汚染のメリットがあり、地域の実情に合わせたさまざまな対策が可能である。しかし「マリノ」では、生活環境改善・自然環境保全という住民の願いを、数多くの問題を内包する大規模土木事業に短絡させ、しかもその問題点について全く省みられていない。川の汚染についても、実態を把握するための水質検査、生物調査さえ行っていない。マリノ

ペーシジョンそのものが、各地のダム事業と同様の  
 実態把握・原因究明なき対策事業となっている。  
 これではいくら税金を投入しても、「漁村の活性化」  
 「自然環境の保全」は実現できないだろう。  
 計画の中に具体的な実態把握と地域の将来ビジョ  
 ンがないことが第四の問題である。

#### 四 地域の財産を見つめて

「マリノ：」事業がその目的を実現するためには、  
 地域環境や文化についての十分な把握、保全・復元が  
 不可欠である。しかし実情は川の自然を「孵化放流のサケ」、  
 河川文化を「さけまつり」に限定し、実際の河川環境や生態系、  
 そして集落に長年受け継がれてきた文化はなおざりである。その  
 うえで都市型施設の整備に偏向した開発を続けるならば、  
 茂辺地の「サケと湧水が育んだ文化」は根本から破壊され、  
 二度と取り戻すことはできなくなる。かつ「マリノ：」は今後の漁村開発のモデル事業である。  
 「漁村の活性化」の名の下、地域特性や実際の自然条件を無視した同様の開発が、  
 各地で急速に進行する危険が大きい。

これからの町づくりには、「まず施設ありき」ではなく、  
 地域による十分なディスカッションが最初に行われなければならない。それは住民が自らの  
 地域をしっかりと見つけ、生活の知恵を出しあうこと、  
 行政は話し合いの場を確保し、自ら調査し有効な情報を十分に住民に提供することである。このとき  
 従来の自然破壊型開発が進んでいないことが地域の大きな財産となる。  
 住民の努力によって自然やそれに根差した文化が蘇り、人が訪れる中で、  
 その町に見合った形・速度で「活性化」していくのではな  
 かるうか。

筆者から一言提言するならば、茂辺地には『命ある川』と『湧き水の里』の復元を願いたい。町中で豊富な魚や水草を見られ、自然と歴史の深い関係や、川や海とうまくつきあう住民の知恵が実感できる町、訪れた誰もが幸せになれるような町づくりを志してほしいと願う。

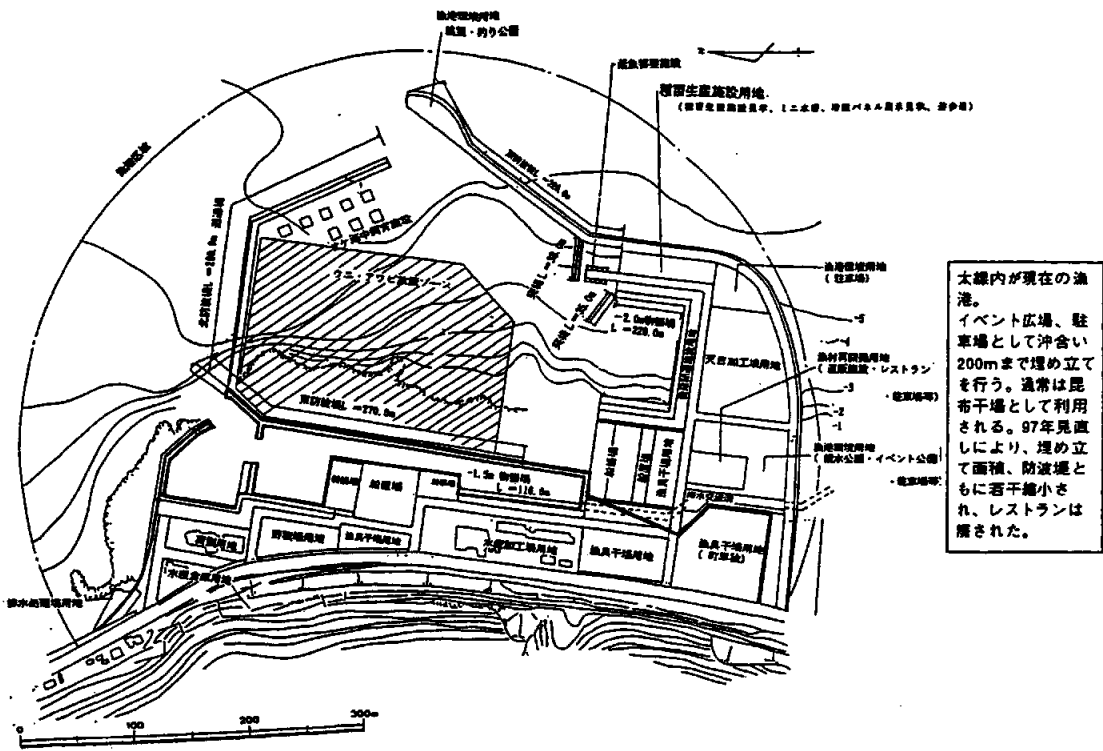


図3 「ふれあい漁港」の概要 (当初計画による)

(注一) 茂辺地川の川岸に建てられた「茂別館」は、上ノ国、厚沢部越えの山道、箱館(函館)方面の山道が集中し、海と山の交通の接点であった。そして茂辺地のサケ、戸井方面のコンブ資源を集約する海峡における交易経済の中心地ではなかったかと筆者は考える。茂別館の二km北には茂別館の本陣ともいわれる「矢不來館」の遺構もあり調査が待たれる。この付近を函館・江差間高速道路が計画されており、さまざまな遺構やそれらを支える地理的条件が失われる恐れが大きい。

(注二) 現在、伏流水は簡易水道とサケの孵化事業に用いられている。生活排水は集落内小川川「トドメキ川」等にたれ流しである。トドメキ川のCOD値は流下につれ減少(二五↓二以下)し、ウキゴリ、カジカ、ウグイ、イワナが生息する。護岸ブロックのすき間から流れ込む多量の伏流水が自然浄化を助けているためであろう。

(注三) 会場設営やイベント内容については、地域資源の活用という視点において、また河川法の上からもいくつかの大きな課題があると思われる。

(注四) マリノベーションは余市、釧路が進められており、他にも各地区で類似の事業が始められている。

(注五) 九七年になって漁港計画は二五%ほど縮小された。直接の理由は国家的財政危機のためだが、「ふれあい漁港」が地域に必要不可欠なものではなく、「まず予算ありき」の計画だったためであろう。一方、下水道関係予算は五%上昇し対象地域も拡大している。

(注六) 地元漁協では関係役所から下水放流水に

ついて説明をうけ、「飲めるくらいにきれいななる」と理解していたという。だが養殖海域に下水処理水が放流されることから水産物のイメージダウンを懸念し、処理水の沖合い放流を要請している。

(注七) 下水道の一般的な建設費は一mあたり十〜二十万円。本計画では人口一人あたり平均建設費は約一〇〇万円、またパイプ一mあたり約八万円とされている。

(注八) 合併処理浄化槽の設置費用は一戸平均一〇〇万円前後、維持費用は一戸年間五万円程度。個人資産なので行政に支払う分担金は不要である。函館市では三十万円を上限とした補助金があるが上磯町にはない。放流水の基準はBOD値二十ppmだが、一〜三ppmという高性能浄化槽も開発されているという。

主な参考文献

- 「都市の水循環」 押田勇夫編 NHKブックス 一九八二
- 「だれも知らない下水道」 加藤英一 北斗出版 一九九三
- 「合併浄化槽入門」 本間都・坪井直子 北斗出版 一九九五
- 「水の世界戦略」 中西準子 岩波新書 一九九四
- 「上磯町史」 上磯町 一九九七
- 「中世の蝦夷地」 海保嶺夫 吉川弘文館 一九八七
- 「清流松倉川」 松倉川を考える会編 幻洋社 一九九七
- 「上磯地区マリノベーション拠点漁港漁村総合整

備計画書」 北海道 一九九四  
 「茂辺地漁港漁業集落整備事業基本計画書」 上磯町・財団法人漁港漁村建設技術研究所 一九九四

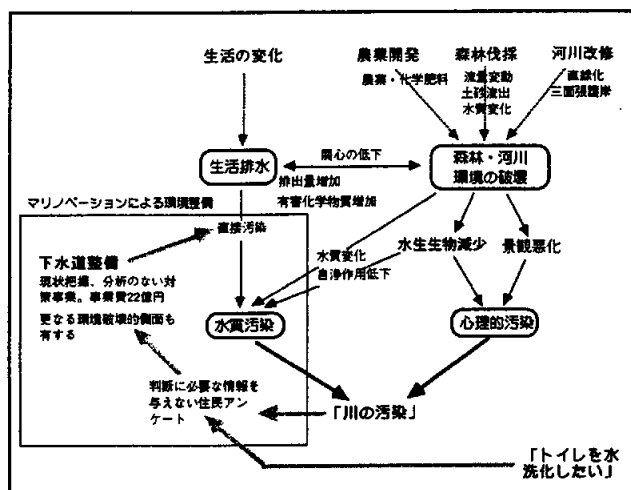


図4 川の汚染とその要因、マリノベーションによる対策